

2017年3月20日 第525号 (隔月発行)

アジアの友

The Asia-no Tomo

2-3

FEBRUARY-MARCH

2017

「留学生のメンタルヘルス 相談支援体制の現状と課題」

大西晶子 東京大学准教授インタビュー

奨学団体に聞く (公財) 橋谷奨学会

「ベトナムと結んだ縁」 木村友紀さん





ABK 日本語コース 2016 年度卒業式を開催

3月1日（水）文京区立駒込地域活動センターにてアジア学生文化協会日本語コースの卒業式が行われました。卒業生 136 名は楽しかった日本語学校での思い出を胸にそれぞれの進学先に巣立って行きました。進学先：国立大学 19 名、私立大学 77 名、専門学校 21 名、その他 19 名



アジアの友

2017年2・3月号 第525号

目次

	インタビュー
2	「留学生のメンタルヘルス 相談支援体制の現状と課題」 大西晶子 東京大学国際本部国際センター本郷オフィス 准教授
	奨学団体に聞く
13	公益財団法人 橋谷奨学会
	連載コラム
20	泰日工業大学 奮闘記 (第22回) 「孝行娘と美味しいメロン」 池田隆
	私が魅かれたあの国
23	「ベトナムと結んだ縁」 木村友紀
	ABK is My Home
29	最近の出来事&懐かしの来館者
30	知友会通信
32	MEMBERS

<表紙> ベトナム南部、カントーの水上マーケット
(メコン川)にて Photo: Yuki KIMURA

大西晶子 東京大学准教授 インタビュー**留学生のメンタルヘルス
～相談支援体制の現状と課題～**

日本の教育機関が数多くの留学生を迎え入れるにあたっては、質の高い教育や魅力的な施設の提供といったものと同様に、彼らが異文化の中で戸惑い、行き詰ってしまうことがないよう、生活、勉学、そして精神面のサポート体制を充実させることも重要だ。今、留学生はどんな悩みを抱え、それをどう解決しようとしているのか。そして受入れる側はどんなサポート体制を築くべきなのか。3,000人を超える留学生が学ぶ東京大学の留学生相談室で、日々様々な相談に対応する同大学国際本部国際センター本郷オフィス准教授の大西晶子先生（臨床心理士）に、現状と課題についてうかがった。

**様々な相談に対応する留学生相談室**

編集部： まず先生のご専門である臨床心理学において、研究テーマとされていることを教えていただけますか。

大西： 文化的な背景によってどのように援助の求め方が違うのかということに関心を持っています。援助の求め方には様々なパターンがあるので、どのようなサービス形態がより多くの人にとって使いやすいの

かといったことを研究しています。メンタルヘルス分野に限りませんが、専門性を高めていくとサービスは専門分化していきます。外国の方にとって、短い期間の間にその国の細分化したサービスを詳細に理解して使い分けるのは非常に負担が大きいと思います。ですから、質を上げたり専門性を高めたりすることと、利用のしやすさというものが両方とも成り立つところはどこかということを考えています。

特に留学生対象の相談室に関していえば、特定の国・地域から来ている学生にはすごく使いやすくて、他の地域の学生には使いづらいとしたら、大学の提供するサービスとしては適切とはいえません。このことは大学に限らず公的なサービスにおいても同じで、例えば在住外国人が相談出来るメンタルヘルスの専門家がいないとなると、すぐに言語の問題、英語によるサービス提供、という議論になるのですが、日本に住んでいる外国人の8割近くはアジアの人ですから、仮に言語の問題だとしても、必要なのは英語ではない場合もたくさんあります。また多言語でカウンセラーを揃えれば相談者が増えるかと言えば、カウンセリングという援助の枠組み自体に抵抗感がある方は、提供言語が何であっても、利用はしないわけです。その辺をどうしていくかというのが研究関心としてはあります。

編集部：では、日々のお仕事と東大の留学生相談室についてお聞かせください。

大西：日常的な仕事の内容としては、留学生、外国人研究員など東大に関係のある外国人学生、研究者の様々な相談業務となります。

私どもの相談室では「これに関する相談しか対応できない」といったように問題の切り分けはあまりせず、まずはどんな相談でもどうぞということ以案内をしています。その理由として、学生が自分の抱えている問題をどういう問題とみなすかは、それぞれが育った文化や社会によって異なってくるということが一つ。もう一つは、例

えば「ここは心の問題に対応する場」ということを明言した場合に、サービスの内容がわかり、来やすいと感じる学生もいますが、逆に避けるようになる学生もいるためです。また東大には専門家によるカウンセリングが受けられる学生相談所があり、東大の学生なら誰でも利用できますので、日本語に自信のある留学生の場合はそちらを利用することもあります。留学生相談室については、心理的な面の相談に限らない、もう少し間口の広い相談室ということで案内をしています。

編集部：日常生活に関わる様々な相談から、心理的援助が必要なケースも出てくるということでしょうか。

大西：様々な問題に対応する相談室に心理の専門性を持つ人がいたほうが良い理由として、心の問題を抱えている可能性のある学生が来室した場合に、問題の見立てがしっかりできるということが大きいと思っています。ただし、話を聞いている過程で、これは少しメンタルヘルスのことを想定しながら関わった方がいいのではと思う場合に、「あなたは心理的な問題があるのでカウンセリングをしましょう」とお伝えすることを必ずするわけではありません。きちりとした相談の枠を設けず柔軟に関わっていく選択肢もあることで、相談機関の利用に抵抗のある学生にも来やすい環境になっているのではないかと考えています。

また、ケースによっては医師との連携も大切になります。学内の保健センターに留学生が自分で行くこともあります。言葉

の問題もありますから、まずこちらに来ることも少なくありません。学生は病気がきちんとしていないと、すぐに通院を止めたり薬を飲むのを止めたりしてしまいがちですので、学生が治療を継続できるよう、受診し始めは付き添って行ったり、学生の相談内容や医療に対する懸念を事前に手紙にまとめて、医師にお渡しすることもあります。心理的な問題への対応が私の専門ではありますが、そこにつなげる意味も含めて、幅広い相談内容に対応するようにしています。

留学生からの相談内容

編集部： では、実際学生からはどのような相談が多いのでしょうか。

大西： 相談室のカウンターで対応する相談の多くは、生活相談や情報提供系のものです。ただ、インターネットの利用、特にスマートフォンが普及して常にネットに繋がっている状態が普通になってきてからは、検索をすればわかるようなライトな相談というのは減ってきています。一方で、学内の細かい決まりごと、学習や進路、就職活動に関すること、人間関係の悩み、恋愛に関わることなどについてはネットで検索しても解決しませんから、そういった相談は変わらず多いです。また、出身国・地域によって年齢層が異なっており、東南アジアからアフリカあたりにかけては30歳前後の学生が中心ですので、そうすると、

恋愛というよりは夫婦関係や子育てに関する相談が多いですね。

編集部： 恋愛などの問題は同年代の同国人に相談するイメージがありますが。

大西： 例えば中国や韓国といった同国人の多い国から来ている学生たちは、多くの問題について同国人同士で相談しているようですが、恋愛や人間関係に関する問題となると、同じコミュニティの中で揉めたり、仲間内でゴシップになりやすかったりということもあり、それを避けて、秘密を守ってくれる人に相談している面があるかと思います。

編集部： 相談を受ける中で通常の相談なのかカウンセリング的な対応も必要なのかという見立てが必要になるわけですね。

大西： 利用しやすいように対応の枠を柔軟に設定している相談室においては、おそらくそこはとても重要ではないかと思えます。相談に乗っている側が、相談者の抱えている問題を適切に見立て、その後の対応を進めていく必要がありますので、ケースごとに丁寧な判断が必要です。受容共感型の対応で話を聞くことで良さそうか、何か介入しなければ問題が大きくなりそうか、あるいは医師に繋いだ方がいいのか、毎回考えながら対応しています。

編集部： 国籍や地域による相談室利用、カウンセリング利用者数の違いというのはあるのでしょうか。

大西： 大学全体を見ると東アジア出身の留学生数が圧倒的に多いので、相談者の数も彼らが自然と多くなります。ただしカウ

ンセリング目的の利用については、在籍数に対する比率で見た場合、欧米の学生が多い傾向はあります。東アジアの学生はキャリアサポート的な支援…就職・進路相談ということでまずはいらっしゃることが多いですね。

母国でのカウンセリング利用が一般的な欧米の学生の場合、カウンセラーとはこういう人だということを知って来室するケースが多く、ちょっと気分が落ち込んでいるといった相談や対人関係の話題が多いです。「留学生ならではの」相談で多いのは、教職員とのコミュニケーションがうまくいかず、勘違いや行き違いがある、その背景に異文化の問題が関わっている、といった相談でしょうか。

編集部： 日本人との関係ではどのようなことに不満を感じる人が多いのでしょうか。

大西： 留学生からよく聞く話では、日本語力が上がってくるにしたがって、日本人の要求水準が変わってくる、間違いが許されなくなってくるということで、日本語を話さない時の方が、ダブルスタンダードで良い対応をしてもらえるとあります。また、欧米の人に対しては、「外国の人だからしょうがない」と言うのに、近隣国から来ている人に対しては「日本文化に従え」という圧力を強く感じるということを、東アジアの学生はよく口にしますし、欧米の学生も自分たちはエクスキューズがきくと言うことがありますから、残念ながら実際にそういう対応をする日本の人が少

なからずいるのだと思います。

編集部： 学生が所属する学部・研究科との関係はどのようになっているのでしょうか。

大西： 本学の場合はそれぞれの学部・研究科に留学生を主に担当としている教員あるいは職員がいますが、規模や留学生数が違いますから、すべての学部・研究科の体制が同じというわけではありません。ただ、必要に応じて学生本人の了解を取ったうえで、それぞれの留学生担当者と連携し、対応に必要な情報を提供してもらったり、学部・研究科で対応したほうがよい問題の場合には、学生をそちらにつないだりします。やはり学生がきちんと学校に来ているか、研究は進んでいるかといった状況は、その学生が所属している学部・研究科が一番把握しやすいため、連携は重要です。

一方で、相談室は相談業務に特化しており学務的な手続き等は一切しませんから、学生としてはそのほうが相談しやすいということはあると思います。あまりうまくいっていない状態について話す場というのは、自分が所属する所とは別にあったほうが気は楽ですね。そういう意味での機能分担というのがあります。

容易ではない回復とサポート

編集部： メンタルヘルスに関わる体調不良というのは、回復までかなり時間がかかるという印象がありますが。

大西： 心理士の仕事や精神科医の仕事というのがポピュラーになってきて、専門家とそうでない人という線引きをし、専門家に任せればすぐに解決するというイメージを持っていらっしゃる方が多いようにも思うのですが、メンタルヘルスに関する問題の多くは、専門家に相談したからといって、すぐに解決するというものでもありません。悲観的な言い方をすると、専門家でもどうしようもないこともある。特に留学のように終わりが決まっているものに関しては、必ずしも学生が望んでいる時間の幅の中で、望んでいる結果にはならない、学業を断念して帰国せざるをえないという場合もあります。だからといって放置しておいて自動的に良くなるわけではないので、介入は必要です。根気強く関わりながら、少しずつ学生が元気になっていくのを支えるというイメージでしょうか。

編集部： 治療のために休学をするといったことはあるのでしょうか。

大西： 適切に休憩をするといったことが回復には望ましいにも関わらず、それが必ずしもできないことがあります。例えば休学すると奨学金が止まってしまうなど、「休む」ということがその学生にとっては、実質留学の終わりを意味していることもあるわけで、そうした場合は、学業を継続しながら平行して治療をしていくという道を可能な限り選択していくことになるわけです。学校に長く出て来られなくなっていたり、まったく研究が進んでいなかったりする状況が既に長期化している場合などは、

対応は本当に難しいです。また学部生は授業に出ず、試験を受けなければ単位が取れませんから、ある意味状況がわかりやすいのですが、院生の場合、特に博士課程になると、それほど授業もありませんから、1年目で体調を崩して、3年目までそのままずるずるいってしまうといったことも生じます。体調が悪い、研究も進まないという苦しい時期がなんとなく続いてしまうことがあるわけです。

編集部： 体調を崩した学生の対応で難しいことや大変なことはなんでしょう。

大西： 身体的な病気の場合に比べて、メンタルヘルスの問題で入院などをした場合は、どこまで情報を関係者と共有するのか判断が必要となります。後日学生が大学に戻ってくるという状況を考えたときに誰がどこまで知っておくのが良いのか、親との連絡を同国出身の学生にさせるわけにはいかないとか、通訳をどうするのかとか、入院治療の同意をどうとるのかといった様々な問題が出てきます。そうした情報の扱いや、誰と協力するのかといったことを決めていくことが必要で、このあたりは身体の病気よりも対応が難しく思います。

また、不安感や恐怖感といったものが強い人を言葉のよくわからない日本の病院に長く入院させておくことにどの程度治療的意味があるのかということを考えなければなりません。一方で帰国させる場合、そこでしっかり治療できるのかという不安もあります。帰国した先に医療機関がない、あっても質がそれほど高くないというケースは

当然あります。また、母国の家族が治療の必要性についてどの程度、どのように理解されているのかもわかりません。帰国した途端に薬は全部いらぬ、民間療法の方が良いと周囲が判断してしまうケースもありますので、学生の回復にとってどの選択肢がベストなのか、回答を見つけるのは難しいですね。

編集部： 研究のことや研究室の人間関係等は、どのように影響していますか。

大西： 留学生がメンタルヘルス面で不調を訴える際、研究がらみのことは全く無関係、ということのほうが、大学院生の場合は少ないようにも思います。ですから、研究室で学生の日頃の状況をしっかり把握しておいていただくことは、不調の兆しに気づき、早目に対応するうえで大切だと思います。ただ学生にとって、勉強が進んでいないということは、先生には知られたくない、言いたくないという場合が多く、先生が注意深く様子を見ながら声をかけて下さったとしても、本人は「大丈夫です」と答えてしまうことも少なくないように思います。さらに、研究室での人間関係自体がうまくいっていない場合もあります。そうした意味では、特に人間関係が研究室内に閉じがちな大学院生の場合、研究室中心の対応は難しさがあるかもしれません。

特殊な状況下にある留学生のストレス

編集部： その他留学生のストレスにはど



のような要因があるのでしょうか。

大西： 英語プログラムが増えて日本語ができない学生が増えていますが、学内環境の英語化がどの程度進んでいるのかというと、かなりランダムです。「英語プログラムです」ということで来てみたけれど、日本人学生がいれば日常の研究室の会話は日本語が中心になるわけです。「周りの学生が何を話しているのかわからないけど、時々自分の名前が聞こえたりする。何を話しているのだろう」と考える時に、人は普通あまりいい想像はしませんから、うまく環境に適応できてないときに被害的になってしまう学生は、日本語がわからない人のほうが多いように思います。また、病状が急激に悪化した学生の中で、国に戻ると症状がすぐに落ち着くことが時々あります。やはりある意味、留学というのは特殊な状況なのだと思います。まったく生活環境の

異なる、状況のわからないところに放り込まれて、人間関係もあまり良くなかったりすると、孤立感を感じ、すごく追いつめられますので。そういうところは日本人学生の体験するストレスとは違うところかなと思います。

編集部： 日本語力や日本文化、日本社会への関心の高さは、日本での留學生活に重要ということですね。

大西： 適応に影響する要因を一つに絞るのは難しいのですが、来日して起きうる様々なことに対して、どのくらい準備ができているのかという点からみると、いきなり正規課程に受け入れられる直接入学の学生は、日本語学校や研究生期間を経て入学する学生と比べると、日本で生活する準備が十分ではないと感じることはあります。中でも書類審査などで受け入れが決まる、日本語を必要としない専攻やプログラムの場合などは、日本が留學先の第一候補ではない場合も多く、また受け入れが決まってから来日までの時間が短く、事前に何も調べていなかった、という学生も少なくありません。そういう状態で来日してすぐ正規の課程が始まりますから、当然負荷がかかります。もともと持っている力が高い学生や、マルチタスクが得意な学生であれば、生活上・学業上の両方のタスクを並行してこなしながらやっていくと思いますが、生活スキルが非常に低い、同時にいろいろなことをこなすのが苦手な学生であると、研究が進まなくなる、非常に高いストレスを抱え不安定な状態に陥るといったリスクが高い

ように思います。

一方で日本のゲームが好き、アニメが好き、日本文化に対する関心が高いといったことが留學の動機である場合も、問題がないわけではありません。当たり前のことですが、大学の研究というのはその研究領域に関する関心が無いと出来ませんので。日本語に関しては、日本語力が高ければ問題を抱えない、というわけではありません。しかし日本語が出来ない場合は自ずと人間関係も狭くなりがちで、自分で対処可能なことも減ってしまうので、日本語が出来ないために困ることが多いことは間違いありません。

大学のグローバル化と留學生の支援体制

編集部： 大学のグローバル化と留學生への相談支援体制の関係はどのような状況にあるのでしょうか。

大西： 支援体制ということになるとまず基本的には、人材の話になるのかと思いますが、人材を確保するための予算が時限つきの場合が多く、したがって既存のシステムを大きく変えようようなものではないように思います。学生サービスというのは、本来は、いつからいつまであって、いつからいつまではない、というものであってはならないと思いますが、予算が切れると担当者はいなくなり、サービス自体が消えてしまうこともあります。

心理の専門家に関しては、グローバル 30

(※1) の時は英語プログラムの導入が一つの目玉でしたので、それ以前に比べ英語ができるカウンセラーを配置した大学は増えたように思います。しかしカウンセリングの業務というのは1日8時間フルで仕事をしたとしても、対応できるのは6人ほどが限度です。今まで日本語での対応しかしていなかったところに、外国語が出来る専門のカウンセラーを加えるのはもちろん意味あることですが、それで対応は全て終わりということでは不十分だと思います。カウンセラーができることというのは留学生支援のうちの本当にわずかなことですから、留学生支援体制を拡充するためには、もう少し根本的な構造をどう変えていくかということも並行して考えていく必要があると思っています。

編集部： 国立大学に留学生センター、国際センターが置かれるようになり、留学生に関する専門性の高いスタッフの方というのは以前に比べ増えているようにも見えますが。

大西： 国際センター、留学生センターについては、この5年くらいで大きくカラーが変わってきています。私が国際センターにいる10年の間でも2～3回の波があり、ここ数年は、予算も含めた様々な学内の関心というものは日本人学生の送り出しのほうにいています。つまりスタッフの数は揃っていても、留学生の受け入れに特化し

た専門性を持った人材や、その業務に時間を割ける人は、むしろ減っているのではないのでしょうか。

国立大学の留学生センターに指導部門が設置されていた時には、留学生数に応じて必ず専任の指導担当教員を置くということになっていましたが、独立行政法人化後はそれもなくなり、指導担当、相談業務に特化してやっていた人が退職した時に、そのままポストがなくなるということが増えています。

編集部： では、新たな人材の確保は行われていないのでしょうか。

大西： 任期付きで、専門の教員・職員を採用している大学が多いと思いますが、そうすると雇用年数に制限がつきます。非常に良い人に来ていただいて、お仕事を覚えていただいて、学内のこと、留学生のことをよく理解できるようになった頃には、任期が切れるということになります。

この仕事というのは座学で学べる部分というのは少なく、オン・ザ・ジョブで学んでいくものが非常に多く、また色々なものがどんどん新しくなっていきますから、知識を更新していかなければなりません。連携する相手が頻繁に変わってしまうというのも、業務をやっていく上で厳しいものがありますね。特に大学全体が大きく変わっていく必要があるという時、ある程度の長期的な視野を持って、継続してそ

(※1) グローバル30(サーティー)は、日本の国公立13大学を対象とした文部科学省が実施する支援事業。対象となる学部・研究科では「英語学位コース」が設置されるなど留学生の受入れ環境向上の整備が行われた。

の改革に取り組んでいかなければならないのに、上から下までの人材が頻繁に入れ替わっていく、問題が共有された頃にはいなくなってしまうというのは、どうなのかなと思います。

編集部： 留学生を受入れる大学に留学生専門の相談窓口は必要だとお考えですか。

大西： 日本人学生に対する学生支援の考え方も大学によって違うので一概には言えないのですが、日本人学生に支援サービスが必要だとすれば、日本人に必要なものがなぜ留学生には必要ないのかということになりますよね。ただこうした議論をすると、留学生は学生相談室をあまり利用していないから、専門の相談室も必要ではないという議論になったり、留学生も日本人学生も「学生」なので同じ相談室を利用すればよいという議論になったりしがちです。ただ、外国という特殊な環境で学んでいる学生達ということを考えるのであれば、日本人学生と同等かそれ以上のサービスが必要であると想定しても間違いではないと思います。大学内にサービスがあることを知らなかったり、今ある形だと利用しにくいと思っていたり、つまり大学側が把握できていない、潜在的なニーズがないか、きっちりと把握しながら、必要なサービスの在り方を議論する必要があると思います。

専門のカウンセラーを置くべきか、ということになると、大学の現状によって違うように思います。ただ、留学生対応時には、言葉は日本語で対応可能、アドバイスをすれば後は自分で出来るというような相談

ばかりではなく、対応時に相当なケースワークが必要となる場合も多いので、ある程度以上の留学生が在籍している大学では、カウンセリング中心の相談室で、留学生への対応もすべて担っていくということは、現実には非常に難しいと感じます。

日本語学校における学生のケア

編集部： 今、学生数が大きく伸びている日本語学校ですが、学生の精神面に対するケアについて、学校側が注意すべきことはなんでしょう。

大西： 日本語学校の場合は学生全員が留学生ですから、学生に必要なことは何かを学校側がある程度特定しやすいのではないかと思います。そういう意味では、起こりうる問題や注意点について学生に予め伝えておくことも有効ではないでしょうか。来日したばかりの時はみんな素敵な留学ライフを想像していますし、問題が起きうるということをそれほど想定していませんから、問題を抱えると自分だけが困っていると思いがちです。ですから、長い留学生活の間にはこんなこと、あんなことが起きるので、何かあったら早めに相談してね、ということをおっしゃっていただくだけでも、相談しやすくなると思います。

真面目に勉強しに来ている学生さんは、進学等の目標に向かって死に物狂いで頑張ると思いますが、最終目標の達成にはきちんと健康管理をすることが重要だというこ

と、例えば眠る時間はとても大事だといった基本的なことを繰り返し伝えることも大切だと思います。またどのような来日目的の学生が多いのか、どのような国の出身者が多いのか、といったことも、学校によって異なっていると思いますので、それを学校側がよく把握しておき、いつ頃どういったことに注意を払う必要があるのか、といったことを少し意識的にしていかれると、予防という意味では良いのかなと思います。

編集部： 学生数が増えると、どうしても顔の見える学生とそうでない学生に別れるようです。

大西： たとえば、入学してすぐ、5分でもいいので、担任や担当者が全員と面談をする。そして数か月に一度くらいの割合で、最近の様子等を聞く場を設けるといったことは、可能ではないでしょうか。

またそうしておく、学生は何かあった時に相談しやすいですし、相談されるほうも全く知らない学生ではなく、生活状況も少しは把握しているわけで事情も飲み込みやすいように思います。また、教職員が個人として話を聞いてしまうと、情報の共有がしにくくなりますから、学校としての対応とすることで、たとえばファイルのようなものを作り情報を共有できれば良いように思います。

中国出身の心理専攻の大学院生が、日本語学校でカウンセリングの部屋を開いた事例がありますが、かなりの数の学生が相談に来たようです。基本的には学業や進路の相談が多くなるわけですが、そこから個人的な悩みの相談に発展するケースもあったようです。同じように日本語学校から学部や大学院に進学した先輩留学生であれば、

大西先生の近著

「キャンパスの国際化と留学生相談 多様性に対応した学生支援サービスの構築」

(東京大学出版会 ¥5,200 + 税)

留学生相談の現場で活躍する著者が、日本の留学生受入の歴史をふまえた上でキャンパスの国際化における学生支援サービスのあり方を問う1冊。留学生および相談従事者への調査、相談室の実践事例等の豊富なデータから、相談体制の現状や留学生の相談機関利用実態を明確にし、留学生が利用しやすい相談機関の姿、多様性に満ちたキャンパスにおける学生支援サービスのあり方を提案している。教育機関関係者はもちろん、グローバル化を目指す現代日本において、様々な分野で国際化業務に携わる人必携の1冊となっている。



相談しやすいのかなと思いますので、そうした方に活躍してもらう手もあるかと思います。守秘義務や話の聞き方などもありますから、心理を専攻している留学生であれば尚良いと思います。

編集部： 学校はもちろん地域の日本語ボランティアや交流活動などを通して、一般の方も留学生と親しくなり、相談や悩みを聞く機会が増えてきているようです。

大西： 相談されるというのは、交流を通じて信頼関係ができていればこそだと思うので、そうした関わりをされている方は学校よりもむしろ、学生の変調にも気付きやすいのではないかと思います。ただ、相談を受け、では次にどうしたらいいかというのは、みなさん悩まれるところではないでしょうか。励ませばいいのか、ただ話を聞けばいいのか、病院に連れて行けばいいのかなど、判断に迷われるのではないのでしょうか。もちろん学生が大学等に所属しているのなら、ウェブサイトなどを見てその大学の相談窓口を教えてくださいませんかと思います。また、病院に繋いだ方がよいケースというのはあると思いますので、眠れていない、食事をとれていない、頭が痛いなどのわかりやすい不快な症状がある場合は、精神科に限らずそうした身体

的な症状を診てくれるところ、その方が行けると思う病院を探してみるのもよいかと思います。多言語対応している所というのは「ひまわり」(※2)などで探せますから、言葉の面だけに特化してみれば、そういったツールを利用することも可能です。病院に行くというのは、人によってはかなりハードルが高いものなので、せっかく受診して初回の経験がいやなものにならないよう、もしボランティアの方が優しく丁寧に対応をしてくれる医師を知っていれば、そこに付き添って行ってもいいかもしれません。

ボランティアの方が、親身に相談にのっていると、相手から夜中にまで電話がかかってきたり…ということもありえるかもしれません。不必要に抱え込んで問題が長引くとボランティアの方も大変ですし、親身に対応すれば体調が良くなるかというところとは限らず、両方もが疲れて行くということがありますから、病院や相談機関につなぐことを選択肢に入れるのは必要なことだと思います。

編集部： 本日は貴重なお話、ありがとうございました。

(※2)「ひまわり」(東京都医療機関案内サービス) 東京都内の医療機能情報と薬局機能情報を提供するWEBサイト
<http://www.himawari.metro.tokyo.jp>

大西晶子(おおにしあきこ) 東京大学国際センター本郷オフィス准教授 博士(教育学)・臨床心理士
1997年東京大学教育学部卒業、1999年東京大学大学院教育学研究科修士課程修了、2005年東京大学大学院教育学研究科博士課程満期退学、2006年 東京大学留学生センター講師、2010年 同・国際本部国際センター本郷オフィス講師、2013年より現職。主な著書に『キャンパスの国際化と留学生相談～多様性に対応した学生支援サービスの構築』(東京大学出版)、『学生相談必携 GUIDEBOOK』(下山晴彦ほか編、分担執筆、金剛出版)、『エンパワメントのカウンセリング』(井上孝代編著、分担執筆、川島書店)

奨学団体に聞く

公益財団法人 橋谷奨学会

HASHIYA SCHOLARSHIP FOUNDATION

日本で真剣に学ぶ留学生たちが安心して勉学に励めるよう、経済面のみならず独自の交流行事などを通して、時に精神面をも支える奨学団体。その活動と魅力をご紹介します本コーナーの第4回目は、今年設立から36年目を迎える橋谷奨学会にお邪魔し、常務理事の塩谷隆則さんにお話をうかがいました。

<概略>橋谷奨学会は月島食品工業株式会社（東京都江戸川区）の創業者である橋谷亮助氏により1981年に設立された。日本とインドネシアの友好親善に寄与することを目的にインドネシア出身の留学生に特化した支援を行っている。これまでの36年間に支援した奨学生数は700人以上、総支給額は6億円を超える。

<応募資格>日本の専門学校（1年以上の専門課程）、大学または大学院（研究生含む）に在学または入学を許可された私費インドネシア人留学生。他団体からの奨学金を受けていない者。

<奨学金>月額10万円

<支給期間>支給開始月から学校を卒業・修了するまで。ただし、年度末毎の審査に合格しなければ継続支給はされない。

<募集人数>若干名

<応募締切>4月下旬

<問合せ先>Tel 03-3689-1120 又は在学大学・学校 担当窓口

<http://www.tsukishima.co.jp/zaidan/scholarships.html>

インドネシアに特化した奨学金事業

—— なぜインドネシアに特化した奨学金になったのでしょうか。

奨学会の創設者で、初代理事長の橋谷亮助は戦前国策会社の社員としてインドネシアのセレベス島（現スラウェシ島）で現地の若者に対する農業指導を行っていたのですが、橋谷たちの熱心な指導に現地の若者

も一生懸命応えてくれたといいます。その後成果が上がったところに終戦を迎え、全てを捨てて帰国することになったのですが、橋谷は帰国後もインドネシアの青年たちのひたむきな眼差しを忘れることができず、彼らのために何かをしてあげたいという気持ちはずっと持ち続けていたんです。

そして、帰国後創業した月島食品工業株式会社が大きくなり財産が出来たので、そ

れをインドネシアの若者のために使おうと決心したわけです。

—— **これまでの奨学生数はどのくらいになるのでしょうか。**

平成28年度の学生を含めると延べ人数で746人ですが、平均受給期間は2年数か月と、一人で複数年受給している学生もいますので、正味人数としては300人少々となります。

—— **開始当初、苦労されたことなどはありますか。**

インドネシア人限定ということで、開始当初は奨学生が見つからずどうやって応募者を増やすか、いろいろと考えたようです。インドネシア大使館にお願いして学校や先生を紹介してもらったりもしました。当時はインターネットもありませんし、インドネシア人留学生の絶対数も少なかったのも、その点は苦労したようです。

—— **毎年の奨学生数は17名ほどで、新規採用者数はおよそ7名とのことですね。**

17名のうち半数以上が前年度の継続者です。一番長い学生は大学1年生から大学院を卒業するまでですから6年間、もしかするとこれから博士課程に進学するかもしれませんが、さらに長くなるかもしれません。年間120万円で6年間といたら、現地では家が一つ二つ建つくらいの金額です。たまたま4年生で縁があり最後の1年だけという人もいますが、期限を何年と限定しないのもうちの奨学金の特徴です。

—— **毎年の応募者は何名くらいでしょうか。**

書類応募は40名ほどです。学校指定はしていませんが、推薦枠は各校2名までとさせていただきます。応募書類はまず実績がある学校にお送りしていますが、新規の学校で学生を推薦したいというところがあれば、全て受け付けています。

また学校の差別をしないようにというのが橋谷の意思だったので、当初はほかの奨学金ではあまり受け付けていない専門学校の学生もありました。そういう人たちは卒業してからも奨学金に対する感謝の気持ちを忘れず長く覚えていてくれますね。彼らの中には映画学校を卒業して、今インドネシアで映画監督として活躍している卒業生もいます。

—— **現在はどのような奨学生が多いのでしょうか。また男女比はどのようになっていますか。**

特に選んでいるわけではないのですが、今は大学院生が多くなり、設立当初多かった学部生は少なくなりました。また応募者は地方の国立大学の方が多いですね。おそらく10万円という金額ですと、東京で私立大学に通うのは厳しいのかも知れません。ですから、そうした学生は、もう少し支給額の高いところへの応募を優先しているのかなと思います。特にアルバイトは禁止していませんが、地方の国立大学で、安い宿舎に入れば、10万円でもアルバイトをせずに留学生活を送れるのではないのでしょうか。

男女比についてですが、応募者数は6：4で女性が多くなっています。実際、素晴らしいと思う人には女性が多いですね。

—— 選考はどのようにされているのでしょうか。

これまで理事と評議員の中から選ばれた選考委員が書類選考という形で行ってきましたが、最近所管の役所から「過半数を外部の有識者に」という指導を受けまして、今後選考委員の構成をどうするかということが課題となっています。選考は橋谷の思いを受け止められるような学生を選ぶということが大切で、単にAがいくつあるかといった客観的な成績の基準で選考しているわけではありませんから。また、私たちの役員、選考委員はまったくのボランティアですから、新しい方をお願いするのは心苦しいということもありますね。

—— では、選考の際重視されていることはなんですか。

面接はしていないので、どんなことを身に付けて、将来何をしたいかということを書いた作文を一番重視しています。日本とインドネシアの友好関係にこんなふうに関与したい、日本で学んだことを武器に世界で活躍したい、もっと多くのインドネシア人に日本に興味を持ってもらえるよう後輩を指導したいなど、具体的にいろいろな将来像を書いてもらっています。

—— 日本語力は重視していますか。

作文は日本語で書くことが条件ですから、日本語力は必須になります。実際に会ってみたら思ったより出来なかったという人もいますが、日本語レベルについては条件にはしていません。

ただ個人的には、全て英語で授業を受け



塩谷さん

て、まったく日本語を覚えずに帰ってしまうというのはどうなのかと思います。日本とインドネシアの関係に本当に貢献できるのか、アメリカに勉強に行ったのとあまり変わらないのではないかという気がするんですね。

また今は、日本の大手メガバンクや大商社はもちろん、中小企業クラスもインドネシアに進出していますから、日本語が出来るインドネシア人は絶対的に不足していません。給与も英語人材より高くなりますから、そういった意味でも日本語力はつけておいて損はないと思います。

—— 継続受給についての条件は難しくないのでしょ



交流会で集った奨学生たち

学生とはせっかく縁があったのだから、彼らが目的を遂げて卒業できるまで面倒をみるべきだと考えています。もちろん毎年学習状況は報告してもらいますし、学校の担当教員からの推薦も必要になりますが、特別問題のない場合は継続が可能です。

奨学金継続に関しては学校の担当教員の熱意をととても感じます。学生はものすごく成長して進歩していて、この奨学金を継続してもらえれば必ず目的を遂げられる。だからぜひお願いしたいという熱意ある推薦のお言葉をいつもいただいています。

年1回、月島の社員と交流

—— インドネシアは世界で2番目に日本語学習人口が多いそうですが、その割に日本への留学生は少ないですね。

やはりイスラム国家であるということ、食事と習慣の壁が高いですね。うちの奨学生でも半数は仏教徒であったりクリスチャンであったり、日本での生活に抵抗の無い、

食事も気を使う必要の無い人が多いです。

特に大学ではコンパなどお酒の席も多いと思うのですが、それを一切拒否して人間関係を築いて行くことの難しさなど、先輩たちから聞いてしり込みするところはあります。

—— 奨学生との交流会は年1回だけでしょか。

奨学金の授与式も行っていないので個人的にはもっとやりたいと思っていますが、予算の範囲内ということがあります。交流会で全国から学生を呼ぶための交通費と食事代は奨学金以外で使う唯一の運営費なので、奨学生数を減らして、もう少し交流事業に予算を充てる等、考え方はいろいろあると思いますが、しばらくは交流会の回数はこのままで、今の奨学生数を維持したいと思っています。

—— では交流会はどのようなことをしているのでしょうか。

以前は書道体験、華道体験などいろいろしていましたが、まずは母体の月島食品工業(株)を理解して欲しいということで、現在は工場見学と月島食品社員との交流に力を置いています。特に海外事業に携わっていてインドネシアに行ったことがある社員には必ず参加してもらおうようにしています。

月島食品の商品はパンやケーキ、お菓子の原料で、グループ全体で製造しているアイテムは1500種類に上ります。マーガリン

だけでも300種類ほどあって、形、固さ、バター量などによっていろいろに分類されます。そういうことを奨学生に知ってもらい、業務用で表には出ない会社だけど、橋谷が作った会社がこれだけの会社になったということを伝えたいと思っています。この交流会にはほとんど全員の奨学生が参加しています。

—— 交流会以外で奨学生と定期的な連絡を取ることはありますか。

仕事で近くに行った際に連絡を取るということはたまにありますが、制度としてはありません。橋谷奨学会の3人のスタッフは奨学会からの給与は出ておらず、1年の90%は月島の仕事で忙しいものですから、普段定期的に奨学生と交流を図るのは難しいかなと思います。

—— 卒業後、月島食品に就職される奨学生もいるのでしょうか。

去年初めて1人女性を採用しました。まだ研修中でケーキやパンのことなどを研究所で勉強しています。もちろんこれからはインドネシアからお客さんが来た時の対応をお願いしたり、現地に出張して通訳兼販売促進をしてもらったりということを考えています。

ただ、今までは奨学生を採用するということはまったく考えていませんでした。月島がたまたまインドネシアで事業を始めてインド

ネシア語で苦勞していますから、日本語、インドネシア語両方分かる身近な人材がいればありがたいということで、月島食品の社長でもある奨学会理事長の戸田が希望者を募ったら、名乗り出てくれたという感じですね。

—— 2012年3月にジャカルタで同窓会を開催されたとのことですが、卒業生のネットワークというのはあるのでしょうか。

奨学会の30周年にあたる年度にジャカルタで開催しました。同窓会については課題となっています。創設者の橋谷は「奨学

日イをつなげて30年

橋谷奨学会が同窓会

622人に計5億円超支給

日本を去りトヨタや三菱などに就職した奨学生が、卒業後、同窓会を通じて、月島食品の社長に会い、奨学金の返済や就職のサポートを受ける。同窓会は、卒業生が月島食品の社長と会い、奨学金の返済や就職のサポートを受ける。同窓会は、卒業生が月島食品の社長と会い、奨学金の返済や就職のサポートを受ける。



戸田理事長（前列右から4人目）ら奨学会関係者と、今後同窓生のネットワーク構築を進めていくという元奨学生たち

■ 奨学金の返済と就職のサポート
同窓会を通じて、月島食品の社長に会い、奨学金の返済や就職のサポートを受ける。同窓会は、卒業生が月島食品の社長と会い、奨学金の返済や就職のサポートを受ける。

■ 同窓会の開催
同窓会は、卒業生が月島食品の社長と会い、奨学金の返済や就職のサポートを受ける。同窓会は、卒業生が月島食品の社長と会い、奨学金の返済や就職のサポートを受ける。

2012年3月にジャカルタで開催された橋谷奨学会の同窓会のことを伝える現地の日本語新聞(Daily Jakaruta Shinbun 2012.3.5)

生を追いかけるな、何かを義務づけたりするな」と常々言っていたものですから、初期の頃の卒業生についてはどこで何をしているかがわからず、同窓生を集めるのは大変でした。現地のいくつかの新聞に同窓会をするのでぜひ連絡が欲しいと広告を出してみたのですが、それも思ったほどの反響はありませんでした。

メールアドレスの記録がある人については、昨年まとまったメールを送り、消息とか最近の状況についてだいぶつかめています。その辺、メールはありがたいですね。

ただメールがお互い楽にできるようになったのはここ15年くらいですから、2000年以前に卒業した学生に関しては連絡を取る手段がないというのが実情です。

同窓会については、インドネシアで行うのがいいのか、日本で行った方がいいのかということもありますね。今は日本に残って活躍している人もけっこういますから、日本でも一度やってみようかなとは思っています。

また、私たちとして一番ありがたいのは、ジャカルタのインドネシア日本友好協会(PPIJ)の事務局長をうちの第二期生が務めているということです。ヘル君といって、本業はパナソニック・インドネシアの副社長なのですが、彼はジャカルタジャパンプラブの理事も務めています。日本とインドネシアの友好のために活躍してほしいというのが橋谷の一番の願いだったので、ヘル君の活躍は私たちも嬉しく思っています。彼には同窓会長をやらせてもらっています。

インドネシアに伝えたい橋谷氏の思い

—— 橋谷さんはもともと農業がご専門だったのでしょうか。

大学は東北大の経済学部で、農業が専門というわけではありませんでした。ただ農家の出身でしたから少し勉強すればどうしたらもっと稲が出来るのかといったことはわかったわけです。

日本の前にインドネシアを占領していたオランダ人はインドネシア人に肥料をいっさい教えなかったそうで、橋谷たちはなぜ肥料というものが必要なのかということから教え始めたといいます。そして、出来た米についても、自分たちの指導で増えた分だけを日本軍に提供して欲しいと申し出たそうです。結果、収穫量はものすごく増えて、橋谷は軍から表彰されたそうです。

その後、農業実務学校を作り、優秀な青年たちを集めて指導をしていたところで終戦を迎え帰国することになるわけですが、自分たちがリーダーになるんだと熱心に学ぶ青年たちの目が忘れられないということを橋谷は元気な頃よく言っていました。

その話をすると学生たちは喜んでですね。橋谷さんってそんな人だったんだ、この奨学金の10万円を無駄にしてはいけなと。

—— 今年度(2016年度)で総支給額が6億になるということですが、ぜひインドネシアにも伝えたいお話ですね。

そうですね。橋谷亮助という人がいて、橋谷奨学会がこんなことをしているということは、インドネシアでもっとPRしたい

と思っています。月島の仕事で現地に行き、初めての食品会社を訪問する際、営業ですから決して厚遇はされないのですが、橋谷のこと、奨学会のことを話すと、日本にそんな人がいたのかと態度ががらりと変わるんですね。ですから橋谷のことを多くのインドネシア人に伝えることは、日本とインドネシアとの友好のためにも大切だと思っています。

また、先ほどのヘル君も橋谷さん、橋谷奨学会がなかったら今の自分はなかったという話をことあるごとにしてくれているようです。実はヘル君が現地のインドネシア日本友好協会の事務局長を務めているので、日本から（一社）日本インドネシア協会会長の福田康夫元首相がインドネシアに行くと、どこへ行く時も付いて通訳をしているそうです。そうした時も橋谷奨学会の話をよくしてくれているらしく、つい先日も協会の副会長から入会しませんかというお電話をいただいたところです。それで橋谷奨学会で入るか月島食品で入るか悩んでいるところです。奨学会はお金がないということもありますが、月島食品として入れば、日本とインドネシアの関係に会社として協力できているという自負をこれからも忘れなくていいのかなと考えています。

—— 塩谷さんご自身の夢などがあればお聞かせください。

私はいつか月島食品の現職をリタイアしますが、そうしたらもっと奨学会のことに取り組みたいという夢を持っています。



橋谷奨学会スタッフのお三方

仕事というより学生とのコンタクトをもっと綿密に、メールを毎日読んだり、返事を書いたり、そんなことが仕事に囚われずにできる。常務理事をやらせていただいていますから、そのくらのことはしなければいけないと思っています。

それから、これまで支給額や人数、事業内容といったことは全く変えないできていたのですが、その辺りも少しずつ変えて行ければと考えています。留学生奨学団体連絡協議会（JISSA）で他団体さんのお話を聞かせていただいているおかげで、いろいろなアイデアが出始めていますから（笑）。

歴代の社長がずっと創業者の意思を引き継いで奨学会の理事長をしているのですが、橋谷が亡くなってからもずっとその意思が繋がっていくというのは素晴らしいことだと思っています。私も出来る限り貢献していきたいと考えています。

—— 貴会のますますのご発展をお祈りしております。ありがとうございました。

バンコクの泰日工業大学で活躍するスタッフ&先生によるリレーエッセイ

泰日工業大学 (TNI) 奮闘記

② 孝行娘と美味しいメロン

池田 隆

「先生、私の家のメロンです。」そういって、一人の学生が、可愛らしいメロンを差し出した。

筆者は、授業時間以外に、やる気のある学生を集めて会話練習をしている。アピサラー・チャンタプロムさん（経営学部会計学科4年生）も、そのひとりだ。前回の会話練習の時、家族のことが話題となり、美味しいメロンを作っていると教えてくれた。

バンワメロン (BANG WA MELON)、これが彼女の家のメロンの商品名だ。

彼女の家は、チャオプラヤー川を渡ったバンコクの西側、バンワという所にある。普段は大学近くのアパートに住んでいるが、週末は家に帰り、メロン販売を手伝っている。値段は150 バーツ（約450円）からで、週末の2日間で100個を売り上げる人気商品だ。3連休などになると、遠くからも客がくるため、普段の週末の倍以上の売り上げになる。

ちなみに、タイの平均世帯収入は、27500 バーツ、首都圏では、44700 バーツということ考えると、週末だけでこれほどなので、商売繁盛と言える。

人気の秘密は何といっても、その美味しさだ。一口食べると、メロンのさわやかな香りと共に、強い甘みが口いっぱいに広がる。とても美味しい。いくつでも食べたくなる味だ。

2016年1月1日にメロンの販売を始めたばかりだが、テレビで3回、新聞で2回も取り上げられていることが、その美味しさを証明している。

このメロンには、少し秘密がある。これは、日本のメロンなのだ。日本人の感覚からすると、日本の果物というイメージはないが、種を取り寄せるときは、「日本のメロン」と指定する。もちろん、タイにもメロンはあるが、少し種類が違うため、やはり、「日本のメロン」と言う。タイでは、高級品の部類に入り、人気がある。そのため、普通のローカルな市場では扱っておらず、デパートでしか買うことができない。

彼女のお父さんがメロンを始めたきっかけは、お父さんの出身地、サコンナコン県（タイ東北部）で栽培されていた美味しい日本のメロンとの出会いだ。それから、4、5か月かけて、栽培方法を学び、800平方メートルの敷地にビニールハウスを3棟建設した。お父さんは以前、建設会社で働いていたため、設計、溶接、配電、給排水等、全て一人で完成させた。

栽培方法も、日本式の水耕栽培だ。水耕栽培とは、土を使わずに、栄養分を溶かした水を与えて栽培する方法だ。土は細菌が多く、かびや病気の原因になるため、使わないほう



アビスラーさん



お母さん

お父さん。ビニール
ハウス建設中

がよいという。そのため、細かくしたココナツの繊維を土の代わりに使っている。水耕栽培は管理しやすく、効率が良い。

ちなみに、メロンは1本のつるに1つだけ成長させるため、他の果実を間引く必要がある。間引いた果実は、きゅうりの様に生野菜として食べたり、スープにして食べたりして、無駄にしないように気を配っている。

メロンは、80日で成長する。しかし、生産が追いつかず、今では少し離れた場所に所有する2400平方メートルの土地でもメロンを栽培している。

お父さんとお母さんはメロンの世話で大忙しだ。それを孝行娘が支える。

彼女の役割は、週末の販売と、種の輸入だ。タイの業者を通すよりも、日本の会社から直接仕入れたほうが、輸入の送料を入れても、安く済む。それに、タイで手に入れた種は、偽物の種が混じっていることも

あるため、ロスになるが、日本の種は、100パーセント信頼できるので、本当に良いという。

そんな彼女は、夏休み中(4月)に、1か月程、日本に短期留学する。彼女の目的は、日本語学習と、日本のメロン事情の視察だ。そのため、この日の練習は、インターネットで、日本のメロンについて検索して、それを筆者が解説するというものになった。

彼女は、メロンの情報に目を輝かす。単語も、メロンや植物に関したものを教えると、「これこれ、これを待ってました」とばかりに、嬉しそうに、そして、一生懸命メモを取る。その表情からは、少しでも両親の役に立ちたいという気持ちが伝わってくる。本当に真面目で良い学生だ。

孝行娘と美味しいメロン、どちらにも、お父さんとお母さんの愛情がたっぷり注がれている。

池田隆 (いけだたかし)

泰日工業大学(TNI)教養学部日本語講師。2003年青年海外協力隊員として、タイ国ウボンラチャタニ大学に赴任。その後、タイ南部タクシン大学を経て、現職。

私が魅かれたあの国

ABK アジアセミナー室ベトナム語講師 木村友紀さん

ベトナムと結んだ縁



撮影：小林 傑

政治、経済分野に限らず、近年は国民レベルでの交流も活発となっている日越関係。留学や就学など日本で暮らすベトナム人が増え続けているのと同様、ベトナムを訪れる日本人も増加の一途を辿っており、2016年の訪越日本人観光客数は70万人を超えて過去最高を記録したという。ベトナムと関わりを持った日本人の中にはその地に魅了され、現地に留学をしたり、仕事に就いたりする者も少なくない。今、東京と埼玉を中心にベトナム語講師、通訳、翻訳者として多忙な毎日を送る木村友紀さんもそのうちの一人だ。彼女を惹き付けたベトナムの魅力とは。ベトナムとの出会い、留学時代の思い出、そしてベトナム語を学ぶ楽しさについてうかがった。

初めての海外 初めてのベトナム

木村さんがベトナムと出会ったのは19歳だった大学2年生の頃。大学の先生が代表を務めるNPO「ARBA」が主催するベトナム・カンボジアツアーに参加したことがきっかけだった。ツアーは現地の教育施設を巡り、子どもたちや先生と交流をしながら現状を学んでいくというもので、海外旅行の経験がなかった木村さんは単純に「面白そうだな」と参加を決めたという。

若い頃に体験する海外、特に初めて訪れる外国のインパクトは時として絶大で、その後

の人生をも左右してしまうことがある。木村さんにとっての外国はそれまでテレビで見ただけの世界。本当に存在するのか？それさえ確信できなかったという彼女の無垢な心に、ベトナムという国は鮮烈な印象を残すことになる。

「街並み、バイクの多さ、建物の並び方、耳に入ってくる外国語、そしてどこに行ってもする魚醤の臭い…。五感から入ってくる情報全てが刺激になって、今でも忘れることが出来ません」

このツアーで木村さんはカンボジアも訪れているのだが、二番手となってしまったその

国の印象はそこまで強くはなかったらしい。もし行った順序が逆だったら…。「今ごろクメール語をやっていたかもしれませんね(笑)」

ベトナムとは初めから赤い糸で結ばれていたのかも知れない。

子どもへの思いに気付く

初めての海外旅行で、すっかりベトナムに魅了された木村さん。当然その後の学生生活はベトナムにどっぷりつかること…と思いきや、帰国後彼女が取り組んだのは保育士になるための勉強だった。

「現地で子どもたちと交流するのがすごく楽しかったんですね。それがきっかけで、子どもと接する仕事ができたらいいなと思ったんです」

卒業が近づいても就活には目もくれず、大学卒業後は保育園で働きながら国家試験合格を目指した。

一方ベトナムのことは気にはなっていたものの、帰国後すぐに何か行動を起こすことはなかったという。そんな木村さんが改めて自らのベトナムへの思いに気付くのは、大学4年生の時の2度目のベトナム旅行でのこと。一度目と同じツアーに参加して2年ぶりに訪れた現地の学校で、自分を覚えていてくれた先生やスタッフと連絡先を交換し、親密な関係を築いていく。さらに、「初海外で舞い上がっていた」一度目の訪問とは違い、街や人の姿を冷静に見ることが出来たことで、「ベトナム語を話したい、もっとこの国を知りたい」、そう思うようになっていった。

そして大学卒業からおよそ1年後、第一の

目標だった保育士の国家試験に見事合格。「これで食いつぶされる心配はない」と、今度はベトナム語をマスターすべく、現地への留学を決意する。

留学先での経験

木村さんが留学先を選んだ学校はホーチミンの人文社会科学大学の外国人学習者向けベトナム語コース。ツアーで知り合ったベトナムの友人が、母校が主催するこのコースを紹介してくれた。

ベトナム人大家さんのいる一軒家の一室に下宿しながら、週に5日昼間は学校に通い、夜は日本語学校でベトナム人に日本語を教えた。毎日確実に伸びて行くベトナム語力。初めて出会う人々との交流の中で、わかること、できることが増えて行く楽しさ。さらに初めての一人暮らしとも相俟って、木村さんのホーチミン生活は予想以上に充実したものとなった。

一方で日本の当たり前が通用しないベトナム社会。そこでは戸惑うことも当然あった。例えばバスには便利なプザーなどなく、自ら「降ります!」と叫ばなければ止まってくれない。

「それは戸惑いでもあるのですが、どうやってこの難関をクリアしていこう、といった気持ちで毎回トライしていましたから、全然苦痛には感じませんでした」

日々広がって行く自分の中の地図。昨日まではどこに行くのかわからなかった二つの通りが、今日頭の中で繋がっていく。そんな発見の毎日が木村さんのベトナム生活における自信を深いものとしていった。

許してね、わかってね!

スポンジのように異国の文化を吸収していった木村さん。ベトナム生活で苦勞を感じたことはほとんどなかったという彼女が、ただ一つ受入れるのに時間がかかったこと。それはベトナムの人々の謝罪に対する概念だった。

それに気付いたのはコーヒー好きの彼女がいつのもの店に立ち寄った時のこと。あいにくその日はコーヒーが売り切れていた。そんな時、日本であれば「申し訳ありません」の一言が店員さんからは聞けるはず。当然のごとくその言葉を期待していた木村さんに、お店のおばちゃんは思いもかけない言葉を発する。

「『わかってね、許してね』って。それを聞いて、これってこちらが共感してあげる問題なのかなと思ったんです。客である私はその状況を理解して許してあげることを求められる。そんなふうに言うんだとすごくびっくりしたんですね(笑)」

その時はただかコーヒーのことと、大きく気に留めることはなかったものの、その後も友達と理解し合えなかった時、頼んだことをしてもらえなかった時など、様々な場面でベトナム人はこの言葉を口にした。

「切迫した場面では腹が立つようになってしまっ、悪いのはあなたじゃない!って、声を荒げたこともありました(笑)」

それはベトナム人の持つ、許し合い分かち合いの精神や社会の成り立ちからくる考え方によるもの、ということを手では理解していても、なぜ一言謝ってくれないんだろうという思いは簡単には消えず、受入れるまでかな



◀大学院在学当時に下宿していた部屋
ベトナム人大家さんの一軒家で、大家さん家族もこの下に住んでいました。

りの時間を要した。

ただ、今ではそれが彼らにとっての謝罪の方法であり「表現方法が異なるだけだったのかな」と理解できるようになったという。

大学院への進学

もともと1年と決めていた語学留学。木村さんは当初の予定通り2010年の1月、日本へ帰国する。もっとも、ベトナム語力に関しては当初目標としていた大学の(ベトナム語)中級試験には合格したものの、「中身が伴っているような気がしなかった」と、満足はしていなかった。そして悩みに悩んだ末、ここで止めてしまっはもったいないと周囲を説得し、再びホーチミンへと戻ることになる。

半年後、上級試験に合格した木村さんは、ベトナム行きを応援してくれた大学の先生の「勉強を続けるのなら残せるものがあつたほうがいい」という勧めもあり、同じ人文社会科学大学の大学院に進学する。学部はベトナムの歴史、宗教、文化、語学等々を多角的に研

究するベトナム学部で、木村さんにとってはもってこいの専攻分野だった。

ベトナムの場合、修士まで進む学生はすでに社会に出ている者がほとんどで、働きながら大学院に通っているケースが多い。木村さんのクラスメートも20代後半から30代、40代が中心なのだが、みなそうは思えない初々しき、幼さを持っていて、教室にはなんとも不思議な空気が漂っていた。

「20人ほどのベトナム人クラスに外国人は3人だけなので、みんなすごく助けてくれて。授業が終わると理解できたか聞いてくれたり、ノートを見せると言ってきてくれたり、試験前もすごく手厚くフォローしてくれて、なんて恵まれているんだろうって思いました」

グループワークでは発言が遅れがちな留学生の話のみなが辛抱強く聞いてくれる。ちゃ



▲朝の市場の様子

家から歩いてすぐのところにある地元の市場にて、賑わう朝の様子。好きな風景のひとつでした。

んとクラスの一員として認めてくれていることが嬉しかったという。

「日本だったら、こんなに留学生に優しくしてあげられるかなって…」

木村さんは、高校生の時にオーストラリアから交換留学でクラスに来ていた留学生のことをふと思い出した。自分は何かしてあげられたらだろうか、もっといろいろしてあげられたのではないだろうか。

一方で、異文化の教育現場には少なからず違和感を覚えることもあった。大学院の授業はゼミは一切なく講義が中心で、先生の話は学生は一方的に聴くだけ。たまに学生が発言の機会を与えられても、先生の話になぞるだけで、決して異なる意見を述べる人はいなかった。

「これはベトナムの教育全てに言えると思うのですが、先生の言っていることは絶対的なんですよね」

とはいえ、留学生のひとりとして、先生から「自国のことを話してほしい」「あなたは日本人としてどう思う？」など、独自の意見を求められることもあり、「ベトナム人学生よりも自分の考えを発表する機会には恵まれていたのではないか」と感じたという。

大学院の授業はなんと一コマ3時間。毎日ベトナム語のシャワーを浴び、フラフラになりながらも、木村さんは日々新しい知識を吸収し成長していった。

「本当に鍛えられたなという実感はありますね。大学院に行って良かったと思っています」

震災で知った人々の優しさ

木村さんが大学院に通っていた時、日本で



▲朝の公園の様子

朝、おしゃべりをしながらゆっくりコーヒーを飲むのがベトナムの習慣。ベトナムコーヒーは大好きで、飲まない日はありませんでした。

は忘れることのできない大きな出来事が発生する。2011年3月11日の東日本大震災だ。

木村さんがお昼寝タイムと名付けていた長い昼休み、部屋に戻ってインターネットを見ていた時、そのニュースは飛び込んできた。「最初は正直また地震か、程度にしか思わなかったのですが、その直後、次々と現地の友人から電話がかかってきて…」

ことの重大さに気付きテレビをつけてみると、そこには東北の信じられないような姿が映し出されていた。もちろん大学に戻ってもみなが心配して声をかけてくる。木村さんの実家は関東で被害はなかったものの、一連のニュース映像がベトナムの人々に与えたショックは計り知れず、日本人全てが被災者に見えたのだろう。翌日からは街で会う人会う人に「日本人？ 大丈夫？」と声をかけられるようになったという。

また後日、最初のツアーで訪れて以来、折りを見て訪問していた幼稚園を訪ねた時には、先生が「しばらく来なかったから、日本にい

て地震に巻き込まれたと思った。良かった！」と、涙目でハグをしてくれてきた。「人ごとだと全然思っていない。こんなに心配してくれていたということに素直に感動しました。逆の立場だったらこれほど外国のことを心配できるだろうかと思ったんです」

震災を通じ、人々の優しさ、日本への思いの深さを改めて実感し、ますますベトナムへの愛を深めた木村さんだったが、大学院の修士論文は提出せず、学位をとることなく学業を終えることになる。

「何についてどう書けばいいのかということが根本的にわからなくなってしまったんですね。私は何かを研究したいというよりも、もっとベトナム語が上手になりたいという、ただその気持ちだけで大学院に来てしまったので」

語学力だけではなく、予想以上に多くのものを得た大学院生活。学位はとれなくても、そこに未練はなかったという。

ベトナムで働く

2013年9月、大学院を満期退学した木村さんは帰国することを考えるも、「水が合って居心地が良い」ベトナムを離れる寂しさも強く感じていた。

そんな時、木村さんは知人からあるベトナム企業を紹介される。会社はホーチミンのオペラハウスで行われるエンターテインメントショーを制作しており、舞台監督はベトナム人で唯一のシルクドソレイユ出身者だった。既にその舞台を観劇し、その素晴らしさから「ファンになっていた」という木村さんは迷う

ことなくこの会社へ就職する。

会社では唯一の外国人スタッフとして、日本人客のサービス全般を任されることになり、やりがいを持って仕事には臨んでいたものの、同僚は必ずしも友好的な人ばかりではなかった。

「大学院でもまれていたので、ベトナム人社会で生きることに自信のようなものがあつたのですが、学業と利益を求める仕事とは違うんだということを痛感しました」

高い給与をもらう木村さんに対するベトナム人スタッフの嫉みや不満をひしひしと感じる毎日。実際に陰口をたたかれている現場に遭遇してしまったこともあつたという。

「ショックでしたね。ああ、やっぱり私はどこまでいってもよそ者なんだなって…」

学生時代に会った人々はみな友好的な人ばかり。しかしいざ一緒に働いてみると、とうてい彼らと肩を並べて働けるほどのベトナム語力があるわけではない。

「そこで食らいついて頑張るという手もあつたのですが、いろんなショックを引きずってしまい、パワーが湧いてこなかった」

“潮時”という言葉が頭の中をちらつき始めるとともに、会社から依頼されていた仕事は一通り終わらせ、土台を作つたという満足感もあつた。

「このあたりで一度日本に帰ろう」

2014年の秋、木村さんは5年を過ごしたホーチミンを後にする。

ベトナム語の魅力と大切な意思表示

今、ベトナム語のプロとして活躍する木村さんは、ベトナム語の魅力が大きく二つに分

けて紹介してくれた。

まず一つ目は漢字由来だということ。ベトナムでは10世紀くらいまで漢字が公式の文字として使われており、その後歴史を経てアルファベット化はしたが、語源は変わっていないため、今でも約60%の語彙は漢字で書き表すことが出来る。そしてそれがわかるのが日本人の特権だという。

「欧米人とは違って、この言葉はこの漢字だと思ひながら勉強できる。自分たちの言語と通じていることがわかるので、それがすごく面白いですね」

そして二つ目に挙げたのがその豊かな音。ベトナム語の声調は6つ、母音は12個あり、子音も日本語にはない音が数多く存在する。それはある意味日本人にとって高いハードルにもなるわけだが、木村さんはその豊かな音を攻略するのが楽しかったという。

「自分が今まで出したことのない音を発するわけで、最初はちょっと恥ずかしいのですが、慣れてくるとすごく楽しくて、音楽を覚える



▲友人宅でのご飯の様子

家で大勢でご飯を食べるときは、床で食べるのがベトナム式。よく友人たちのお宅にお邪魔させてもらっては一緒に床でご飯を食べました。こういうときにベトナム語の会話を鍛えられたと思います。



◀列車の内部の様子

南北統一鉄道に乗ってベトナムの各地へ旅に行くのが好きでした。

木村さんお勧めの列車の旅。列車はとても古い車両を使っていてかなり趣がある。一番グレードの低い車両に行くと、木のベンチにごさを敷いて寝転がっている乗客がいるなど、ディーブで楽しい世界が広がっているという。

ような感覚で発音していました」

正確に言っているつもりでもうまく伝わらず、相手に「わからないよ」という顔をされるのが未だにあるという木村さん。それを克服していくところにベトナム語を学ぶ楽しさがあると言う。

では、私たちがベトナムの方々と付き合うことになった時、気にかけておくべきことはあるのだろうか。

「まず言語的な面で言うと、話す時、主語を必ず付けてあげることです」

ベトナム語は主語をあまり省略できない言語で、どんな時も「だれが」ということをしつこいほど入れる。

「ベトナム人はそれに慣れていて、私たちが主語を省いて話してしまうと、誰のことを話しているのかわからなくなってしまいます。主語を入れるだけでも会話の時の負担はだいぶ軽くなります」

また、態度という面で見ると、不明瞭な表現は避けることだという。木村さん自身、曖昧に濁してしまったがゆえに誤解されたり、ものごとが決まらなかつたりという経験を何度もした。

「日本人は誘われて行きたくない時、『行けたら行く』と曖昧にしますが、そんな時は『乗り気じゃないから行かない』とはっきり言うこと。はっきり言わなかったことが後で責められる要素になったりします。私自身への戒めでもあるのですが、気をつけるようになっています」

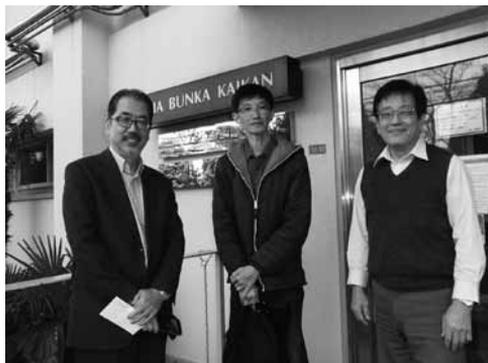
木村さんは今、ベトナム語にどっぷりと浸かった、忙しくも充実した毎日を楽しんでいる。ただ、昔から将来の夢や希望について考えたことはなく、今の姿を渡越前に想像することもなかった。興味を魅かれることがあればチャレンジし、自分のものにするために努力する。それが木村さんのスタンスだ。

これからも彼女は様々なことに興味をしめし、それらを吸収し成長して行くだらう。木村友紀さんのこれからの目が離せない。

木村友紀 (きむらゆき) フリーランスのベトナム語通訳・翻訳者、語学講師。
埼玉県出身。法政大学文学部哲学科卒。
ホームページ：<http://kotonoi.com>

ABK is My Home

最近の出来事 & 懐かしの来館者



(左上) 2016/12/19 Chan Tek Siang さん (中央、マレーシア、日本語コース 88 年度生)

(右上) 2017/1/31 Chan Kok Foo さん (右二目目、マレーシア、日本語コース 95 年度生)

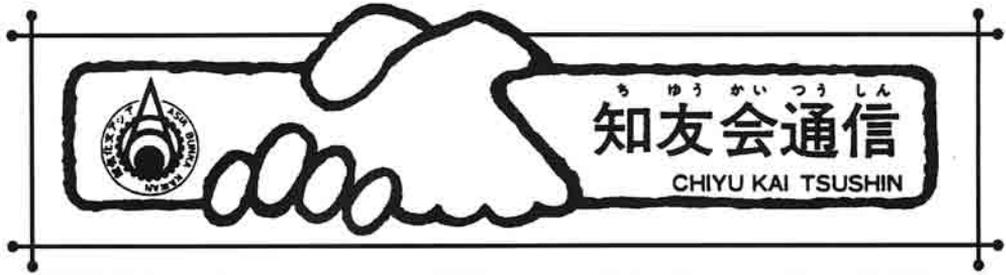


2017/1/26
約 40 年ぶりの来日で来館したインドネシアの元 ABK 同窓会研修生 Dhani Iskandar さんご夫妻



2月3日(金)夜、アジア文化会館(ABK)のフロア学生*と職員の交流会である花金会が開催されました。今回は2016年度最後の会で送別会を兼ねて開催。前列の退寮するみなさんと最後の交流の一時を楽しみました。

※フロア学生：ABKの特別粹入館寮生



奨学金情報

※ 奨学金情報は Japan Study Support のホームページよりご覧いただけます (<http://www.jpss.jp/ja/>)

第33回 在日アジア人留学生研究補助

●趣旨：アジアの出身で日本において学業を進めている留学生が、より一層勉学に精励して知識・技術を身に付けることにより、母国の発展に資することができるよう支援する

●対象：日本の大学・大学院またはそれに準ずる教育機関で学んでいるアジア諸国からの留学生（ただし国費留学生を除く）のうち、以下のいずれかに該当する者

- ① 2017年4月1日現在で、年齢が満30歳以上
- ② 研究生、大学日本語別科生
- ③ 難民

●給付金額：年額10万円（学習・研究のために自由に使用可）

●募集人数：若干名（2016年度は8名）

●応募方法：申込用紙、在学証明書を実施団体まで郵送（申込用紙は実施団体ホームページからダウンロード可）

●応募締切：2017年5月10日（水）当日消印有効

●実施団体・問合せ先：
〒262-0032 千葉市花見川区幕張町5-4-74-1-201 山形気付 RASA 研究補助係
E-mail yamagata@mtf.biglobe.ne.jp
ホームページ <http://www.7b.biglobe.ne.jp/~rasa/assistance/introduction.htm>

イベント情報

第5回『日中友好岸関子賞』論文募集

（公財）日中友好会館は日本と中国の学術交流に貢献する人材育成のため、故岸関子氏の意思のもと『日中友好岸関子賞』を設立いたしました。毎年一回、日本の大学あるいは研究機関で学ぶ中華人民共和国東北三省出身の留学生を対象に、彼らに日本で提出した修士論文の中から優秀なもの1点あるいは2点を選んで表彰し、奨励金20万円を授与しています。

応募資格：中華人民共和国 東北三省（遼寧省・吉林省・黒竜江省）出身の留学生

審査対象：2016年～2017年3月の間に日本の大学院の修士論文学位審査に合格した人文・社会科学系の論文

提出する書類：①修士論文コピー2部（大学院修了年月を明記）②論文要約1,500字以内

③指導教授の推薦状 ④パスポートのコピー（東北三省出身がわかるページ）⑤在留カードコピー

⑥住所、Eメールアドレス等の連絡先 ※②と③は任意の書式・A4

応募締切：2017年5月31日（水）（当日消印有効）

郵送先・問合せ先：公益財団法人 日中友好会館 第5回『日中友好岸関子賞』選考委員会事務局

〒112-0004 東京都文京区後楽 1-5-3 Tel: 03-3814-1261 e-mail kourakuryo-k@jcfc.or.jp WEB サイト <http://www.jcfc.or.jp/>

■ カンボジア・フェスティバル2017

国内最大規模のカンボジアフェスティバルが今年も開催されます。カンボジア古典舞踊、本格的なカンボジア料理、カンボジア人芸能人によるショー、観光案内ブースなど。

日程：5月3日（水）、4日（木） 10:00～19:00

開催地：東京都代々木公園イベント広場+野外ステージ 入場無料

主催：特定非営利活動法人 在日カンボジアコミュニティ

問合せ先：カンボジアフェスティバル実行委員会

Tel 050-6865-0761 E-mail: info@cambodiafestival.com

■ タイ・フェスティバル2017

今年で18回目を迎えるタイフェスティバル。タイ料理や、タイの物産をはじめとするタイの文化、魅力が体感できる国際交流イベントです。会場では、タイ料理、ドリンク、果物、物産などたくさんブースが軒を連ねます。また、ステージでは、タイを代表するアーティストが多数登場します。

日程：5月13日（土）、14日（日） 10:00～20:00

開催地：東京都代々木公園イベント広場 入場無料

主催：タイ王国大使館

問合せ先：Tel 03-5789-2433

■ ラオス・フェスティバル2017

2007年より開催されている本フェスティバルはラオス関連のイベントとしては日本最大規模。ラオス料理やラオスのエンターテインメント、交流団体の活動紹介、ラオスゆかりのアーティストや企業によるショーなど“来場者参加型”が盛りだくさんのコンテンツでみなさまのお越しをお待ちしています。

日程：5月27日(土)、28日(日) 10:00～19:00

開催地：東京都代々木公園イベント広場 入場無料

主催：ラオス大使館館 さくら国際高校 (共催) ラオスフェスティバル2017 実行委員会

WEBサイト：http://www.laos-festival.info/

MEMBERS

〈会費とご寄附の報告〉

2016年12月

賛助会員

(1口)

佃 吉一 板橋区

正会員

(2口)

榊 正義 港区

(1口)

早乙女 和義／博子 品川区

高柳 直正 北区

田中 千佳子 江東区

石渡 荘介 足立区

鶴尾 能子 横浜市

土屋 元子 千葉市

菅谷 真人 千葉市

古川 恵世 我孫子市

久保 亨 文京区

福 壤二 横須賀市

寺門 克郎 習志野市

伊藤 順 安曇野市

金野 隆光 柏市柏

小川 巖 入間市

池野 朋彦／晶子 横浜市

堤 祐子 江東区

松岡 弘 相模原市

西田 祥子 安城市

井上 駿 さいたま市

川口 善行

和田 昭

新田 宜子

米林 太久実

福本 一

勝山 桂香

杉浦 貴和子

小川 輝夫

中畠 正喜

林 登居／ひさ子

工藤 幹雄

(有) プルミエ -ACA

野村 美知子

牧野 政子

香月 恵美子

菊池 幸子

安藤 哲生

田中 洋一

中曽根 信

大益 牧雄

瀬尾 兼秀

(株) デリ一

池森 亨介

高橋 雄造

鈴木 秀明

小林 浩

工藤 博司

大田区

横浜市

西東京市

品川区

船橋市

千葉市

港区

上尾市

川崎市

八千代市

文京区

松戸市

佐倉市

宝飯郡

川西市

笠間市

国分寺市

柏市

中標津町

京丹後市

北区

文京区

宇都宮市

杉並区

豊橋市

松戸市

酒田市

酒井 杏郎

上 高子

小酒 真由子

工藤 幹雄

平峯 克

東京第一友の会

対馬 節子

山口 憲明

田中 洋一

伊佐 玲子

渋谷区

世田谷区

町田市

文京区

川崎市

豊島区

品川区

日野市

柏市

下都賀郡

2017年1月

特別会員

(1口)

張 瑞騰 台湾

正会員

(1口)

真利子 知之 中野区

田守 智恵子 札幌市

岩井 秀明 川越市

松崎 松平 世田谷区

池田 俊二 横浜市

堀 香奈美 横浜市

浜崎 長寿／和子 堺市

北星学園大学 札幌市

ご寄附

榊 正義

田井 満里

太田 京子

土屋 元子

金野 隆光

稲垣 史

港区

北区

神戸市

千葉市

柏市柏

足立区

ご寄附

栗原 静子

築山 淳子

仁木 美代子

気仙沼市

文京区

文京区

皆様の暖かい御支援に
感謝申し上げます

ご入会とご寄付のお願い

当協会は、政府の補助金を受けていない純民間運営の公益法人ですので、財源に限りがあり、皆様方からお送りいただく会費、寄付金は、本協会の活動を支える貴重な財源となっています。何卒ご理解、ご協力をお願い致します。

協会のあらまし

名称：公益財団法人アジア学生文化協会
ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASCA)

所在地：東京都文京区本駒込2丁目12番地13号

代表者：理事長 小木曾 友

設立：1957年(昭和32年)9月18日
故穂積五一氏創設

目的：日本とアジア諸国の青年学生が共同生活を通じて、人間的和合と学術、文化および経済の交流をはかることにより、アジアの親善と世界の平和に貢献することを目的とする。

◆主な事業◆

- (1) 留学生宿舍の運営
- (2) 留学生日本語コースの運営(進学希望者向けの日本語を中心とする教育)
- (3) 留学生に対する情報提供支援
- (4) アジア語学セミナー
- (5) 帰国留学生のアジア文化会館同窓会、(社)日・タイ経済協力協会、ABK留学生友の会との連携・協力

◆会費(年額)◆

正会員 1口 1万円
賛助会員 1口 5万円
特別会員 1口 10万円

会員には広報誌「アジアの友」が無料配布されます。また、広報誌購入だけを希望される方には、購読料年間3千円(十税)でお送りいたします。

当財団に対する寄附金は、所得税、一部自治体の個人住民税、相続税、及び法人税の税制上の優遇措置があります。

2015年度より購読料に別途消費税をご負担いただくことになりました。何卒ご了承下さい。

おかげさまで、当財団は2014年4月1日に公益財団法人に移行しました。これまでご支援いただきました皆様には大変ご迷惑をおかけしておりましたが、これにより会費並びに寄附金は税制上の優遇措置の対象となります。今後とも、皆様のご支援の下、これまでと同様留学生宿舍の運営、留学生への情報提供、同窓会活動等の活動を通じ、アジアの青年の育成と友好親善のために微力を尽くす所存です。引き続き皆様のご支援を賜りたくよろしくお願い申し上げます。

後記

3月1日に行われたアジア学生文化協会日本語コースの卒業式で今年巣立った卒業生は136名。何よりも素晴らしいのは1年半コースの無遅刻無欠席者は25名、1年コースの出席99.9%の学生は9名、それぞれに特別皆勤賞、皆勤賞、精勤賞が授与された。今更ながら学生の勤勉さに驚くと同時に、健全な学校のバロメーターにもなっていると思った。(F)

これまであまり病気にもかかったことのない職員の加倉井弘之さんが、退職を目前に3月初めに旅立られた。享年65歳。長年にわたりABKの宿直、大森寮、太田記念会館、柴井寮等の寮に住み込み留学生の生活を多くを支えてこられた。寮生活で加倉井さんの満面の笑顔に惹きつけられ仲良くなった学生は数知れない。そうした学生との再会を何時も大変楽しみにしていた。また、退職後は仲良し留学生を訪ね歩く計画も立てていたのではないだろうか。加倉井さんはABKの周囲の庭の管理を長年自発的に行っていた。無類の花好きで、毎年様々な花を咲かせ、ABKの皆の心をなごませ、楽しませてくれた。庭には春の紫大根花に始まり、紫陽花、琉球朝顔、真っ赤なサルビア等々、一人で管理するには広過ぎる庭には様々な花が植えられていた。今年は、3月初めに早々と庭に紫大根花が咲き始め、職員がそれを積んで入院先の駒込病院の病床に届け、励ました。それが最後の晩になった。病気が見つかったから数か月の早い旅立ちは、ご本人が一番無念であったと思う。加倉井さんも縁あってABKで働くことになり、たくさんのアジアからの留学生と出会い、友人となり、楽しい時間を過ごし、他の世界では経験できないたくさんの思い出がつくれ、幸せだったと思いたい。(F)

アジアの友 2017年2-3月号

2017年3月20日発行(通刊第525号)

年間購読(送料共)3,000円+税 1部 500円+税

発行人 小木曾 友
編集 アジアの友編集部
発行所 公益財団法人 アジア学生文化協会
東京都文京区本駒込2-12-13 (☎113-8642)
電話番号：03-3946-4121 ファクシミリ：03-3946-7599
振替口座：00150-0-56754 E-mail: tomo@abk.or.jp
ホームページ：(http://www.abk.or.jp/)

published by ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASIA BUNKA KAIKAN)

2-12-13, Honkomagoe, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8642, JAPAN

☎+81-3-3946-4121 ☎+81-3-3946-7599

Email: tomo@abk.or.jp

Home Page: http://www.abk.or.jp/

会員並びにご購読のお申込みはメール・電話または巻末の振替用紙にてお願いいたします。



学校法人 ABK 学館

ABK学館日本語学校

所在地 〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-12-12

電話番号 +81-3-6912-0756

FAX +81-3-6912-0757

URL <http://abk.ac.jp>

E-mail info@abk.ac.jp



ABK COLLEGE

2013年4月に完成した新校舎

新築3階建校舎。最新の耐震設計です。

- 留学生の絆が作る日本語学校 -

ABK学館日本語学校（英語名称：ABK COLLEGE）は1957年に設立された公益財団法人アジア学生文化協会が寮生活や日本語を学習した留学生、そして多くの関係者のご寄付と献身的な協力により、学校法人による日本語学校として2014年4月に開校しました。当校には姉妹校のABK日本語コース（公益財団法人アジア学生文化協会）もあり各種協力を行います。



授業風景イメージ



寮の一例



ABK日本語コース

ABK COLLEGE

ABK COLLEGE (学校法人ABK学館ABK学館日本語学校)			
東京都認可日本語課程(大学院・専門学校・試験・文化体験等)			
	4月入学 1年コース	10月入学 1年半コース	4月入学 2年コース
授業時間	860時間	1,290時間	1,720時間
入学検定料	20,000円		
入学金	80,000円		
授業料 (施設・教材費含む)	620,000円	930,000円	1,240,000円
姉妹校 ABK日本語コース(公益財団法人アジア学生文化協会)			
文部科学省指定大学進学準備教育課程			
	4月入学 1年コース	10月入学 1.5年コース	
授業時間	1,086時間	1,586時間	
入学検定料	20,000円		
入学金	80,000円(大学進学日本語課程) 95,000円(大学進学準備課程)		
授業料 (施設・教材費含む)	720,000円	1,080,000円	
所在地 〒113-8545 東京都文京区本駒込2-12-12			
電話 ☎+81-3-3946-2171 FAX +81-3946-7589			
E-mail info@abk.or.jp			

